

体験学習プログラム 参加学生レポート集

2023年度 夏季

国内体験学習プログラム(徳島)

『四国のへそ』で学ぶ SDGsの架けhashi



事業名	2023 年度 夏季国内体験学習プログラム（徳島） 『四国のへそ』で学ぶ SDGs の架け hashi
日程	事前学習会：2023 年 8 月 24 日（木） スタディツアー：9 月 5 日（火）～9 月 7 日（木） 事後学習会：2023 年 9 月 15 日（金） 事後レポートの提出：9 月 22 日（金） 学内報告会：10 月 4 日（水）
訪問場所	徳島県三好地域（三好市・東みよし町）
参加人数	学生 10 名、引率 2 名（協力団体 1 名、教職員 1 名）
協力団体	認定 NPO 法人 JUON(樹恩)NETWORK および JUON 四国地域ブロック世話人会 公益財団法人 日本財団ボランティアセンター

1. 目的

ボランティア・NPO 活動センターが実施する国内体験学習プログラムは、学生が該地域の地域住民や NPO/NGO との交流を通じて、その地域の抱える問題に触れるとともに、ボランティア等の体験学習を行うことにより、より深く社会の問題について考え、その問題解決に向けて自身の問題として考えるきっかけを作ることを目的としています。

2023 年度夏期休暇中に実施するプログラムでは、森林保全を中心に取り組む NPO と連携し、徳島県三好地域で林業と福祉が融合した持続可能な取り組みを学ぶこと、そして参加学生がプログラムで学んだことに対して関心を持ち続け、その後のボランティア活動や身近な社会課題に対して一歩を踏み出せるような機会になることなどを目的に実施しました。

2. 概要

- (1) 事前学習会（オンライン開催）：8 月 24 日（木）
JUON NETWORK 事務局長の鹿住貴之さんより、日本の森林や林業の現状についてお話いただきました。
- (2) スタディツアー：9 月 5 日（火）～7 日（木）
現地訪問し、以下の体験や見学、お話を聴きました。

1 日目：9 月 5 日（火）
・学生 10 名と引率者 2 名が京都からマイクロバスにて徳島県三好市へ移動
・三好市到着後、社会福祉法人池田博愛会『セルフ箸蔵』にて三好地域の森林林業・木材産業について学習
・祖谷街道の観光（かずら橋、再造林地など）
・宿泊先『角見の郷』にてふりかえりと交流会
2 日目：9 月 6 日（水）
・木材流通施設『榊三好木材センター』および製材加工施設『NISMOC(株)』見学
・社会福祉法人三好やまなみ会『ワークサポートやまなみ』および 樹の紙製造販売会社『榊ビッグウィル』見学
・『セルフ箸蔵』にて樹音割り箸製造体験
・宿泊先『角見の郷』にてふりかえりと交流会
3 日目：9 月 7 日（木）
・三好市内の森林にて植樹体験
・『セルフ箸蔵』にて総括ふりかえり後、三好地域を後に京都へ移動

- (3) 9 月 15 日（金）：事後学習会@深草キャンパス
現地訪問について改めて振り返り、意見共有等を経て学内報告会の内容を決定しました。
- (4) 9 月 22 日（金）：学内報告会で配布に向けて、事後レポートを作成し、提出
- (5) 10 月 4 日（水）：学内報告会@深草キャンパス（オンライン併用）

3. コーディネーター所感

センターの『国内体験学習プログラム』では、コロナ禍前の数年間、遠方のプログラムとして福島県スタディツアー、近隣のプログラムとして滋賀県スタディツアーを実施してきました。貸切バスで長距離移動する福島のプログラムは、参加人数を縮小しながら 2022 年度から復活しましたが、近隣プログラムはコロナ禍も含めて引き続き滋賀県で日帰り実施してきました。今回の近隣プログラムは、活動制限がなくなって最初の宿泊を伴う形になることや、学生にとっても長期休暇中に少し足を伸ばした地域で活動でき、学びになるものという観点で企画しました。

また、当センターの役割として、地域で活動するさまざまな人・団体と学生をつなぐということもあり、過去にもお世話になった JUON NETWORK に協力依頼し、引率や現地プログラム全般をコーディネートいただきました。その中で学生たちが三好地域の皆さんと出会い、本気で地域課題に取り組む大人たちの姿から、社会問題を自分事として捉えたり、自分たちのこれからについても考えるきっかけになったと思います。

一方、費用面では日本財団ボランティアセンターと 2022 年 3 月に結んだ協定を活かし、共催事業として実施したことから、学生にとっても参加しやすい環境を整えられたと感じています。

今後も様々な切り口で学生の学びになるものを企画していきたいと思っています。

4. 学生の報告

事後レポートを次頁より掲載しています。

〈瀬田キャンパスコーディネーター ヒギンズ尚美〉

私はこのプログラムで徳島県・三好市の方々の地域愛、そして温かさを感じました。特に心に残っている訪問先の1つは、社会福祉法人池田博愛会運営の『セルフ箸蔵』という施設で、ここでは一般企業での就職が困難な障がい者の方などに就労や生産活動の機会を提供するとともに、知識や能力向上に向けて必要な訓練を行うといった事業をしておられます。私たちはツアー2日目に、ここで樹恩割り箸生産活動を体験させていただきました。

割り箸製造は国産材のヒノキ・スギの端材を原材料として行われており、認定NPO法人樹恩ネットワークを通して全国の大学生協連合会や一般企業に販売されています。その割り箸生産活動では、多くの工程を踏まなければ私たちの手元に届かないということを知りました。割り箸を商品にできるかできないかを目で見て選別する工程では、箸の欠け、2本のバランス、長さ、色合い、そして匂いなど、思っていたよりも繊細な判断を要しました。同じ作業を行うことから、だんだんと集中力や良い割り箸かどうかの判断がつかなくなってしまいそうになると感じましたが、周りの方々は黙々と作業をしていて、職人さんだなぁと思いました。

そして、機械で裁断した割り箸を大まかに選別する工程では、割り箸がとてつもないスピードで流れてくるので、初心者にはそれが実際に使えるかを判断することがとても難しかったです。それをセルフの利用者さんは難なく行っているの、本当にすごいなと感じました。



休憩時、複数の方とお話をさせていただきました。すべての方がお話好きで、話をしているうちに話が弾み、休憩時間を超えてしまうほどに時間を忘れていました。なかでもそこにいたおばあちゃんは、私の祖母にそっくりで身近に感じたので、多くのお話を聞くことができました。その方はほとんど毎日セルフ箸蔵まで歩いて来ているらしく、足腰が強くて健康だと思いました。また、京都へ観光に行った際に訪れた場所の感想を聞いて、記憶力もしっかりしていらっしゃるなと感じました。

セルフでの体験から、割り箸を作ることが都市と山村をつなぐ架け橋になり、障害を持つ人々の日々の暮らしに健康という幸せを与えてくれている、と感じました。



3日目に行った植樹ボランティアでは、カブトムシやクワガタムシが大好きなクヌギの苗を植えました。私のグループが植えた場所は見た目の傾斜がとてもあり、初めは怖気付いていましたが、気づけば集中して植樹を楽しむことができました。植樹をしたことで、自然を守る方々の一員になれたことを嬉しく、また誇らしくも思いました。

今回のプログラムでいろんな人からお話を聞いたり、体験や交流などを通して、自分も多くの方々の支えがあって生きている、生かされていると感じました。また、樹恩ネットワークの鹿住さんが話されていた「木がなければ人は生きていけない」という宮大工の故 西岡常一さんの言葉にあるように、私達は自然を生かしているのではなく、自然にも生かされていることに気づけるいい機会になりました。自分自身今回のプログラムで本当に良い経験ができたと思っています。林業がより身近になったし、興味もより大きくなりました。この経験を次に生かすためにどんどん行動して行こうと思います。

今回の国内体験学習プログラムでは、徳島県三好地域を訪問させていただきました。

「セルフ箸蔵」

事前学習では、メインプログラムの割り箸製造の動画を見ていました。しかし、動画と実際現地に訪れて見た時とでは全然印象が違いました。ここは、数名の職員さんと 56 名の障がい者の方たちが働いている施設です。年齢は幅が広く私がお話させていただいた方の中には 78 歳の方もいらっしゃいました。とても元気な方が多く、話してるこっちまで笑顔にしてもらいました。割り箸製造の作業のうち、2 工程体験しました。1 つ目は製造した割り箸を使えるものとそうではないものに分ける作業で、2 つ目は縦長の木の板を機械にセットして、割り箸の形になったものを乾燥室に送るという作業でした。どちらの作業も神経を使うものでしたが、2 つ目の作業は機械を使うため危険度も高く、また夏場はかなりの暑さを感じるため集中力を要する作業だと感じました。日頃、何気なく使っているお箸にこんなにたくさんの作業工程があるとは思いませんでした。どんなものにでも作り手の苦勞があるということが知れました。



「ビッグウィル」

同じ日にビッグウィルさんという天然木極薄突板連続シートを作っている会社にもお邪魔しました。ここでは、うちわやトランプ、名刺、壁に貼るシートなど商品は多岐にわたっていました。社長が大切にしていることは商品を作る中でのストーリーだと仰っていました。現在は SNS でたくさんの情報が流れてきて、

取引先と会わなくても商品を購入することができます。しかし、そんな時代だからこそ時間をかけて取引先の所に行き、商品を実際に見ることで本物に触れることができると教えてくれました。また、そこでストーリーが生まれると仰っていました。私自身その話を聞いてハッとさせられるものがありました。何事においても一流を自分の目で見ることはすごく大切だと思います。SNS は大変便利なツールではありますが、もちろんデメリットもありこれからさらに SNS が普及する時代にどのように自分が向き合うべき考えさせられる良い機会にもなりました。

「植樹体験」

3 日目は朝食を食べた後、植林体験を行うため大川持農林業施設に向かいました。宿泊施設から車で 15 分ほどの場所でしたが、すごく斜面が急になっていて驚きました。現場に着くとすぐ周りの山が見えてきて、展望台やブランコなどがあり自然豊かですごく癒されました。林の中に入りグループに分かれて植樹を行いました。地面に穴を掘り、木の苗を植えるというシンプルな作業でしたが、場所によっては斜面が急になっていたり、土が固いところがあったので意外と力が入る作業でした。一緒に作業をしてくれた三好林業イノベーションセンターの田中さんは素早く作業をこなしていて、普段から林の中で作業されているんだなと思い大変素晴らしいなと感じました。森の中には虫がたくさんいて、私の住んでる地域ではなかなかないで、そういった所からも自然を感じることができました。

今回のプログラムで私はたくさんの方と接する機会がありました。プログラム前日は徳島の天候が不安定で作業の日程が変わったりしましたが、特に大きく天候が崩れることなく本当に良かったです。

セルフ箸蔵さんではかなり専門的なことを教えていただきました。名前にもあるセルフは英語で SELP と書きサポート、ヘルプ、リビング、パーティシパイト（参加）の意味があるそうです。私達で言う賃金のようなものも発生します。ですが、福祉は B 型事業なので最低賃金とは連動しないということなど、このプログラムに参加していなかったら知ることが出来なかったことがたくさんありました。

質疑応答の際に参加メンバーがしていた質問なども自分では思いつかないものが多々あり、とても良い刺激になりました。また、夕食後の振り返りの際三好市の職員さんの取り組みや徳島に対する思いが知れて、私自身もっと今住んでる地域について興味関心を持とうと思いました。この経験を糧に今まで以上に学びに積極的になろうと思いました。

私が今回このプログラム参加した理由は、林業は私たちの生活の中で必要不可欠であるのにも関わらず、ほとんど林業についての知識がない。その中で中学時代に習った社会で林業従事者が年々減っているということ思い出し、林業の現状について興味を持ったからである。

今回のプログラムの体験で林業従事者が減っている問題や国産の木材の使用率が低い問題など、林業の現状について知ることができたが、一番に伝えたいことは、三好地域の人たちの地元愛である。今回のプログラムに合わせて、感じたことを述べていく。

まず、1日目は最初にセルフ箸蔵でオリエンテーションと林業についての学習を行い、その後、観光をした。観光では、かずら橋やしょうべん小僧、ひの字溪谷に行った。三好の自然を堪能することができ、自然の力でリフレッシュすることができた。気になることは、なぜ、しょうべん小僧があそこにあるのかということである。観光後は、宿泊施設の角見の郷へ行った。角見の郷ではセルフ箸蔵の方達と夕食を食べながらお互いの大学時代の話などをし、昭和の時代と現在の違いを知ることができた。



ひの字溪谷

2日目は木材流通加工施設『(株)三好木材センター』を訪問し、そこでは自分たちで森を買い、木を育てているというお話を伺った。そうすることで安定して取引先に木材を供給できる、そんな強みがある。太さが違う丸太を重機で上手に仕分けしていて、迫力があり驚

いた。

次にワークサポートやまなみに行った。ここでは障がいを持った方が働いており、次に訪問する(株)ビックウィルで製造している樹の紙の一部の工程や、かご製品を作る作業を見学することができた。そして、ビックウィルでは樹の紙の工場を一部見学した他、社長の話を伺った。「現地に足を運ぶことが大事」と話されていて、このプログラムで徳島に行き、生で見て、聞くことができるありがたさに気づいた。また、日本の木は国内での使用率が低く、その理由は値段が高いからであると思っていたが、実は日本の木材は安く、ビックウィルではできるだけ高く買い、価値を上げようと取り組んでいる。それを聞き、利益でだけを考えるのではなく、地元のことも考えていて、この地元愛に感動した。

そして、セルフ箸蔵で割り箸製造体験をした。働いている方は難なく作業をしており、簡単そうに見えたが実際にやってみると大変で、コンベアがどんどん流れていき、慌ててミスをたくさんして大変だった。セルフ箸蔵とワークサポートやまなみでは利用者さんが自立できるようにサポートしていて、地域のためという思いをよく感じた。また、割り箸の原料の端材はお金を払っていて、これもビックウィルのように地元の林業を支えるためという地元愛を感じた。

3日目では植樹体験をした。急斜面のところで足場が悪い中、鍬で穴を開けてそこに苗を植えるのだが、体全身を使って作業をしてとても疲れた。このような大変な作業をしている林業従事している方はすごいと思った。



植樹した斜面

今回の林業体験で林業の社会における大切さを理解することができた。日本の林業を推進するために私

ができることは、今回のプログラムで学んだことを共有し、林業に対して多くの人に興味をもってもらうことである。また、今までは都市部のほうが農村部よりもいいと思っていたけれど、農村部は地域の繋がり合いや自然の豊かさなど、農村部の良さに気づくことができた。今回は林業✕福祉についてメインに学んできたが、農村部の少子高齢化について気になっており、教育や子育て支援などの取り組みについても学びたいと思った。日本の木材がより多く使われるように、木の製品がどこの木を使っているのかを気にして、日

本の木材製品を使いたい。また、プラスチック問題で木材の製品に置き換わることのような木材関係のことに注目していきたい。

私は国産木材をどう工夫し販売すればいいか？担い手をどうふやしていけばいいか？ということを実地の人から聞いてこの問題を考えていきたいと思い、このプログラムに応募させていただきました。

樹の紙製品の製造・販売会社『㈱ビッグウィル』の近藤社長のお話で、木の単価が高くなっても買い取り林業者を助け、その分私たちが特殊な技術で付加価値をつけ、卸業者にストーリー性のある商品であると説明し買ってもらうことが大切であるという言葉が心に響きました。近藤社長が「自社の商品を売るため、目星をつけて会社にアプローチするにはイオンのCM など環境保全に意識している情報にアンテナを張り、収集することが大切であること」、また「自分たちの足で訪問することが大切」という言葉も印象に残りました。これは、今回全行程同行いただいた樹恩ネットワークの鹿住さんも同じで、各訪問先の方々に鹿住さんが知られているのは自分たちの足で訪問しているからこそ交流が深まり、今の関係ができていますからだと思います。オンラインでの交流だけではなく現地交流する重要性を学びました。



『ワークサポートやまなみ』の概要として、障害の方を支援するという場所だと知っていましたが、グループホームを提供するサービスや就労支援事業を提供するサービスもしているとは知らなかったのが勉強になりました。また、軽症だった障害を持つ方々は突然いつもと異なった言動・行動をとり始めてもすぐにワークサポートやまなみさんの職員が気付けるように作業終わりのミーティングに障害者の方々と簡単なお話をし、日記をつけることをしていると聞いて、そういった努力を怠らないことで、障害を持つ方々が安心して暮らせるようにしているのだと学びました。

『セルフ箸蔵』では割り箸生産活動を体験させていただきました。割り箸生産体験では、高温の湯で蒸せ



た木板を箸状に切断し、箸状になっているか判別する作業と製造された割り箸を検査し、ささ切れがないか判別する作業をさせていただきました。蒸した木板を機械にのせるだけでもスムーズにできなかつたり、コンベアがゆっくり動いているように見えても箸の判別をする必要がある中ではとても早く感じたりして、難しかったです。

割り箸の検査で、ささ切れがあったら外すということではできませんでしたが、箸の形が不揃いであるということや木の匂いが強いなどを見分けることがとても難しく、時間がかかりました。休憩時間にセルフ箸蔵さんの利用者の方々とお話をさせていただきましたが、見知らぬ人からお話をしても笑顔で話してくれて嬉しかったです。

私は、このプログラムを通して二つのことを学びました。一つ目は林業を携わる人は伐採・製材業者だけではなく、割り箸を製造する社会福祉の方々、木材チップを利用し憩いの場を提供するの方々など多くのヒトが関わっているということを知りました。二つ目は国産木材を販売していくためには利益だけを考えないで、国産木の単価が高いときも買い取り商品化していく過程で付加価値をつけ、お客様に安い外国産材の商品より国産木を使ったストーリー性のある商品を提供して、お客様がこの商品にこんなストーリーがあるなら買いたいと思わせることが大切であると学びました。

私は今回、徳島県三好地域（三好市・東みよし町）へ2泊3日で行った。近くには剣山、そして雄大で翡翠色が特徴な吉野川が流れる自然豊かな街である。町の風景を見ていると木材を使った建物が多かった印象だ。

このプログラムでは、森林保全だけでなく三好地域の林業に関することについても学んだ。ここでは木材市場である㈱三好木材センターをはじめ、伐採から流通、加工、販売までの過程において、なるべく地域や徳島県内で安定供給できるようになっており、林業をまちの主要産業として位置付けている。また、一般社団法人『三好林業イノベーションセンター』では長期的な計画を行っており、若い世代に林業について興味を持ってもらうため木へ関わる体験や学ぶ機会を与えている。

それだけでなく、社会福祉施設ワークサポートやまなみやセルフ箸蔵、樹の紙製造を主におこなう株式会社ビックウィルは、三好地域の主な産業である林業と福祉を連携させることによって障がい者の方への雇用の供給や賃金を渡し、生活の安定をはじめとした仕事観や働きがい、結婚する、家庭をもつ、子供を育てるといった人間らしい生活を送ることを可能にしている。施設の方がお話をされていたが、市からの税金だけでは生きていくことはできても家庭を持つといった誰かとともに生活することは困難な状況にあるという。このように林業と福祉がそれぞれ独立するのではなく、主要産業と福祉を連携させることでそれぞれが互いにメリットのある状態をつくり出し、またそれが地方創生にもつながっていると感じた。

セルフ箸蔵では実際に働いている方からお話を伺うことができ、その中で「ずっと働きたい」と言っ



セルフ箸蔵でできた割り箸で約50度の部屋で乾燥させている。この後、仕分けが行われる。

ている方がいて、それが私にとってすごく印象的だった。私としてはできるだけ働かずに生活したいと考えているので、生涯を通して働きたいと言えるのは環境や仕事観を含めて、そのような場所で働くことができるのは羨ましく思った。

林業に関してもどうしても男性がする力仕事や土がつき、よく汚れる作業というイメージや疲れる、くさいといった偏見があった。しかし、話を聞いていると最近では機械化が進み、力の有無はあまり関係がないということだった。他にもドローンの活用をはじめとし、最新のテクノロジーを活用したスマート林業プロジェクトを展開している。林業に対する力仕事のイメージが今回の体験で覆った。



NISMOC(㈱)で加工された木材。これからホームセンターへ出荷される。

植樹体験では、あのような斜面にヘルメットを被り、長靴を履いて、鋏を持っていくという経験をしないため気温や汗が心地よく、普段の生活ではすることができないであろう経験ができた。道中にあった高い木も誰かが植えたのだろうと考え、今回の私が植えた木も何十年後かに植林体験にきた誰かにすごい木だなどと思ってもらえたらよいなと思い植樹した。

今回のプログラムを通して、施設の方から話を聞いていて産業と福祉のそれぞれのヨコのつながりを感じる場面があった。それぞれの共通の理念があったからできることなのだと思う。その共通の理念というのが徳島をもっと盛り上げたい、そして障がい者をはじめとした様々な理由から安定して仕事ができない方の雇用機会を増やしていきたいという熱い気持ちがこのような素晴らしい形を生み出したのではないだろうか。また、三好市・東みよし町のように林業を町の産業としている自治体は他にも存在すると思うが、その他の自治体はどのような方法で林業と寄り添っているのかが気になった。また、三好地域のように林業となにかを連携させて地域づくりを行っているのかも気になった。

まずはこのボランティア活動を通して、学びが多かったことに感謝したいです。

元々、私は高校生の時強豪校でスポーツをしていたためとても厳しい環境に身を置いていましたが、大学生活になって解放されて、遊び回っているだけでした。そんな中このボランティア活動で何か感じれるものがあつたらいいなと思い、参加させて頂きました。実際に行ってみるととても感銘を受けることが多々ありました。

そのひとつに、ビックウィルの社長の話が最も印象深く残っています。その話の中には自分のこれまでの旅路や、ポリシーである「現地に行って本物に触れる」という言葉もありました。この言葉に私はとても影響を受けて、これからはネットなどで見るのもいいけど実際に見ることを増やしていこうと感じました。また、ビックウィルやセルフ箸蔵、NISMOC などのみなさんの地域へ対する愛を感じれたのも、現地に赴いたからなのかなと感じます。地域の人々の働く場所や障がい者の就労の機会を設けたり、地元の木を高値で買ったなど、本当に地元を大切に活性化したいんだなという気持ちがあるのを感じました。



1 番質疑応答が長かったビックウィル

セルフ箸倉では樹音割り箸作り体験をしました。私は体験をするまで割り箸作りはほぼ機械で工程もあまりなく、すぐ終わるものだと思っていましたが、実際はいくつもの工程を大勢で取り組んでいて、思っていたものとはかけ離れていたものでした。さらにあんなにもたくさんの工程を踏まえないといけなのに、販売価格はとても高値と言えるものではありませんでした。私は、もう少し作る工程に目を向けて価格設定するのいいのと思いました。

休憩中では障がい者の方達とたくさんのお話をしました。このことにも先入観があつて、あまり会話がままならないと思っていましたが、冗談も通じるし普

通に会話していて、これまで勝手に会話できないと思っていた自分が間違いだと気づかされました。2 日目は沢山の施設や会社を訪問でき、最も学びを得た気がしました。

3 日目には植樹体験をしました。植樹とはこんなにしんどいものなのかと感じました。特に私は今回の中では 1 番急な斜面で植樹をしたのでかなりビビっていましたが、植樹指導して下さった地元の方が「もっと何倍もの斜面がある」と仰っていてとても驚きました。このような事実を知らない人もいると思うので、もっと知って欲しいと感じました。



1 番斜面がキツかったところ

私は今まで SDGs のこともあまり気にしたことがなかったり、仕事では将来自分が稼げたらいいと思っていましたが、地元を良くしたいという人たちや自然環境のことを考えて仕事をしている人を実際に見て、感じて、働くことは自分のためだけではないんだなと思いました。

この 3 日間を通して今まで知らなかったことで気づけたことが沢山ありましたが、これらは SDGs の目標のほんの一部だと思いました。私たちがこれからすべきことは、分別や再利用などの簡単なことで少しでも地球環境を想う行動をしたり、被災地や困窮の現地に足を運んでそこで起こっていることを知り、何かできることはないかと考え行動することです。私は今回「陸の豊かさを守ろう」に関する活動をしたので、次

は「海の豊かさを守ろう」に関する活動を何かしたい
と思っています。

地域や日本、世界はもっとこれからの事を真剣に考
えないといけないと思ったし、実際に考えて行動をし
ている人がいることも他の人に知って欲しいです。

このプログラムは、私のこれからの大学生活を一変

させるようなボランティア体験になりました。

私がこのプログラムに参加したのは何かボランティアに関するプログラムや企画に参加してみたいなと考えていたのが一番の理由であり、参加前は林業に特に興味を持っているわけではありませんでした。

「四国のへそで学ぶ」というテーマに心惹かれ、時期が夏休みという長期の休みということもあり参加を決意しました。

そんな私が今回の体験学習で特に印象に残ったことは三つあります。

一つ目は、セルフ箸蔵の訪問です。セルフ箸蔵とは、日光を当てて木の成長を促進する為の「間伐」という作業で切られた間伐材を使って、障害者の方々が割り箸を作るという作業をしている施設です。木材から箸に加工する過程と箸の選別を体験させて頂きました。私の一番の印象は障がい者の方々が仕事をしていると事前学習会で聞いていたので、仕事はゆっくり行われていると思っていたのですが、それどころか皆さんキビキビ働いていて驚きました。体験させてもらった二つの工程は、自分たちはどちらも現地の方々の速度では到底出来なくて、障がい者の方だから作業は難しいという自分の考えが払拭されました。



休憩時には私を含む訪問した学生たちにフレンドリーに話しかけてくださり、私生活や趣味のことについて話してくださいました。その中には自分一人で暮らしている人もいて、障がいを持ちながら料理や洗濯を自分でしてセルフ箸蔵まで働きに来ているのは、一人暮らしをしたことがない大学生の自分よりはるかに自立して生活されているなど、とても尊敬の念を感じました。

セルフ箸蔵への訪問は、自分の障がい者への考え方を大きく変えました。障がい者だから働けない・コミュニケーションがとれないなどの考え方を持っている人は少なからずいると思います。障がいの重さによって行っている作業は違いましたが、セルフ箸蔵の

方々は皆さん働くことに生きがいを感じ、そこで働くことや交流する時間を楽しんでおられました。そんな姿を見て、障がい者だから仕事や生活は難しいのではないかという私の考え方は変わりました。障がいを持っていなくても生きがいを感じて働いている人はそこまで多くないのではないのでしょうか？セルフ箸蔵の職員の方も、障がい者の方に働く場所を提供できるように寄り添いながら取り組んでいることを、私たち学生に伝えてくださいました。お互いが助け合って成り立っている施設なんだと感じました。

二つ目は、株式会社ビックウィルなどの林業に関する企業への訪問です。切った木材を木の板に加工する会社や木の板から燃えない木や字が書ける木に加工する会社に行きました。訪問先の企業の方々はセルフ箸蔵をはじめとした徳島県の林業に関わる人達の為にどれだけサポートしてあげられるか、お仕事を頼めるかなどを考えておられて、売り上げだけでなく徳島県の為になることを考えておられました。徳島県以外にも、社長さんがわざわざ自分で何時間もかけて移動し現地に行ってお仕事の依頼を貰ったりしているそうです。それには実際に目で見て感じるということとお仕事をしていくまでの過程である「ストーリー」を大切にしているからだと話しておられました。実際に目で見て肌で感じるのは映像で見るのとは全然違うし、ただ単にお金を稼ぐことを考えるのではなく、人との繋がりや想いを大切にしていくことで仕事がより楽しくやりがいを持って働くことが出来るから、君達も実際に目で見るということとストーリーを大事にして欲しいというお言葉を頂きました。私の企業へのイメージは、企業同士の競り合いを勝ち抜いてどれだけ売り上げを上げられるかを考えていると思っていたので、今回のお話を聞いて売り上げよりも依頼主や自分の企業に関わる人々の為を想って働いている企業にとっても憧れを感じました。私はまだ一回生で、これから自分の将来や仕事について深く考えていくと思うので、いい発見が出来たと感じます。

三つ目は、植樹体験です。具体的には車に乗って山奥まで連れて行ってもらい、目印が置かれているポイントに苗木を植えていく作業をしました。掘る人と植える人で二人一組になって作業を進めました。最初に植える場所にたどり着いた時は、平らな場所もあれば本当にそこに植えるの？と思ってしまう程の急な坂もあって驚いたことを覚えています。植えるポイントは道がないので木の上を歩いて行ったり、足場がぬかんでいる道を進んでいったりしました。足場を踏み外したり、体重をかける方向を間違えると滑ってこけ

てしまうので、作業はとても大変でした。その一方で、事前学習会や一日目と二日目を通して木を切って加工して私達が手にする商品になっていくことを学んでいたのも、自分が植えた木が年月を経て成長し、何かに役立ったり誰かの手に届くのかと思うと感慨深さを感じました。自分で実際に体験することで林業の大変さややりがいも感じる事が出来ました。

このプログラムでは、林業の大切さ・SDGs への貢献・障がいを持つ方への自分の考え方・企業を営む人の理念、他にも学年・学舎バラバラの人達と学校や将来についてのことを話したりなど、想像していたよりも遥かに多くの学びを得ることが出来ました。こんなにも学ぶことが出来たり、様々な人と関わったことは自分にとって非常に貴重な体験になったと思います。

今までは自然に触れることが少なく林業に関心がありませんでしたが、今回のプログラムで林業の魅力について知れたので、周りの人に林業の魅力について伝える行動をしていきたいです。そして、自分でも林業は木を切るのが全てではないと分かったのも、製造や加工された商品に関わるような活動にも住んでいるところから参加していきたいです。



私はこのプログラムを通して、森林は私たちが生活する中で、循環型サイクルをはじめとする重要な役割を果たしていることを学んだ。

循環型サイクルとは、農山漁村・ひと・世代をつないで持続可能な社会を作る仕組みで、循環が生まれれば農山漁村に仕事ができ、人が住み続けることができ、人が住むことで自然を活かし、守ることができるというものである。

今回、三好地域の方から森林の役割や林業についてのお話を聴いたり、林業施業現場で実際に植栽ボランティアをしたりして、間伐、主伐、再生林の仕組みを学んだ。植栽した苗が長い年月をかけて森林となり、酸素を増やして二酸化炭素の量を減少させるということは、地球温暖化などの環境問題を解決する上で重要な役割である。

さらに、森林には地球温暖化を防止すること以外にも、水を貯え安定供給する水源涵養、国土を保全すること、林産物を供給すること、生物の多様性を維持する役割などがあると学んだ。また、植樹するだけでなく、下草刈り、間伐、枝打ちなどが必要であることも教わった。



次に、セルフ箸蔵で割り箸の製造を体験して、製造過程や背景などを詳しく理解できた。製造した「樹恩割り箸」は、間伐材・国産材製である。日本の森林を守り、障がい者の仕事をつくることや、食堂の排水を減らす役割がある。樹音割り箸は端材を有効活用しており、環境に優しいと感じた。

そして、(株)ビッグウィルを訪問して、「樹の紙」による地域経済の活性化の取り組みを学んだ。実際に、天然木極薄つき板『恋樹百景』の製品を見て、安心、安全な商品を作り、使われていると感じた。

最初、このプログラムにおける SDGS の目標に関す

る学びは、「気候変動に具体的な対策を」、「陸の豊かさを守ろう」だと考えていた。植樹をしたりすることは、二酸化炭素を減らして地球温暖化を防止し、環境問題に果たす役割が学べるという理由だ。陸の豊かさを守るために植樹をしたりして、緑の自然を増やしていくことが大切だとあらためて感じた。



三好木材センターの材木

しかし、三好木材センターをはじめとするさまざまな木材に関する施設を訪問して、材木を有効活用して人々の生活に役立てることも大切であり、その他の目標である「働きがいも経済成長も」や「住み続けられるまちづくりを」などについても学べたと感じた。

このプログラムで学んだことを私たちの生活に役立てて、SDGS を達成させるための第一歩となれば良いと考える。

以前、大学で里山や環境についての授業を受けた際、森林保全や持続可能な取り組みに興味を持った。その一方で、現在の課題や実際に行われている活動について知らないことが多くあると感じていた。そのため、本プログラムは改めて環境問題や持続可能な取り組みについて考え、体験を通じて学べる良い機会だと思い参加を志望した。



自然豊かな三好市

徳島県三好市は、土地面積の約88%を森林が占めており、森林資源が豊富である。林業を中心とした地方創生の取り組みに注力されており、3日間の活動を通して森林との様々な関わり方を学ぶことができた。

1日目に訪れた祖谷は見渡す限り緑豊かで、森林が作り出す景色に圧倒された。森林セラピーや森林浴というものがあるように、健康の面においてもメリットがあると考えられている森林。自然は確かに人を癒す力があると感じた。普段はなかなか大自然の中に足を運ぶ機会はないけれど、積極的に自然に触れる機会を作りたいと思った。

2日目に訪れたセルフ箸蔵では、「樹恩割り箸」の生産が行われている。樹恩割り箸は全国4ヶ所の福祉施設で製造されており、障がい者の方の社会参加をサポートしている。また、原材料には国産のスギやヒノキの間伐材が使われていることが特徴だ。そのため、樹恩割り箸を使うことで森の間伐が進み、健康な森林を維持できる。さらに、使用後は洗いが不要なため、排水を減らせるという点で環境保全にも繋がっている。私はプログラムに参加する前、割り箸は使い捨てで勿体無いのではないかと考えていた。しかし、先に述べ

たように沢山のメリットがあると知り、森林保全には正しく木を使うことも大切だと学んだ。

割り箸の製造体験では、裁断機での作業と割り箸の選別作業を行った。裁断機は予想以上に動くスピードが速く、テンポよく木の板を機械に置く必要があった。また、選別作業では手作業で一つひとつの割り箸を選別した。実際に体験してみて、どちらの作業も集中力が必要だと感じた。今回体験した他にも、割り箸ができるまでには様々な工程があった。その各工程で多くの利用者の方が携わっていることを知り、生き生きと働かれている様子が印象に残っている。

最終日は植樹体験を行った。参加者全員でクヌギの苗合わせて110本を植えた。傾斜地の地面に道具を使って穴を掘り、約2m間隔ごとに植えていく。健康な森林を守るには「植樹・下草刈り・間伐・枝打ち」のサイクルを継続して行うことが大切だと学んだ。そのサイクルの一つである植樹に、今回少しでも関わることができて嬉しかった。慣れない傾斜地での作業に大変さも感じたが、自身の手で植えた苗が成長していくことが楽しみな気持ちもあり、貴重な経験になった。

今回のプログラムに参加して、今まで知らなかった地域の取り組みや商品を知ることができ、地方創生への関心が高まった。また、訪問先で出会った方々の、持続可能な森林や三好地域を守りたいという姿勢に刺激を受け、行動に移すことの大切さを実感した。今の自分に出来ることは、今回のプログラムで学んだことを身近な人と話す等、言葉にして発信することで一人でも多くの人に関心を持ってもらうことだと考えた。また、樹恩割り箸のように使うことで森林保全に貢献できるものを知り、他にはどういったものがあるのかを調べてみて、良いなと思うものを生活に取り入れていきたいと思う。今後も環境問題や地域の課題に関心を持ち続け、何が出来るのかを考えていきたい。



植樹体験での集合写真

今回参加した国内体験学習プログラムでは、徳島県三好地域で行われている林業の取り組みについて現地に訪れ学んだ。私が今回のプログラムを志望したのは出身が高知県ということもあり、お隣の県である徳島県にスポットを当ててどのような取り組みがなされているのか大変興味が湧いたからである。それではプログラムで体験したことや感じたことについて報告する。

まず、一日目は天候の影響で日程が変更となり、徳島県の観光スポットである「祖谷のかずら橋」「ひの字溪谷」などを訪れた。実際に自然を体感することができ、三好地域は本当に森林に恵まれた土地であることが体感できた。宿泊施設では高知県の郷土料理である皿鉢料理がふるまわれ、高知県出身である私にとってはとても懐かしく感じられた。

二日目は三好木材センターやワークサポートやまなみ、ビックウィルなどの施設を回り、かなりハードスケジュールではあったがとても充実した一日になった。

まず、三好木材センターでは山で切ってきた木々を重機を使って分類する作業をしていた。これは様々な形や種類の木々を角度を変えて確認しながら仕分けしていて長年の技術が光る工程だった。

次にワークサポートやまなみでは、ビックウィルとの連携作業を障がい者の方たちが行う福祉と林業が融合された取り組みが行われていた。木を薄い紙のようにする高度な技術が磨かれ、そこで作られた木の紙をビックウィルに運び、製造・加工され全国へ届けられていた。ビックウィルでは近藤社長が熱心にお話してくださり、私たちからも多くの質問が出た。その中でも近藤社長が人とかかわりなどの「ストーリー」を大切にしていると語ってくれたことが印象に残っている。

その後、セルフ箸蔵を訪れた。そこは間伐材や木材を切って余った部分を用いた「樹恩割り箸」が製造されている障がい者施設である。私たちも実際に利用者の方と一緒に割り箸製造体験をしたが、素早く選別したり順序良く木を機械に挿入したりすることが必要で、容易な作業ではなかった。

三日目には実際に山に入り、植樹体験をしてきた。私自身もともと登山をしていたので山を歩くことには慣れていたが、植樹をする場所は傾斜がきつく大変な作業であった。また、場所によっては土壌が固く住民の高齢化が進んでいることも考慮すると、傾斜地での植樹は体力的にも難しく森林が廃れてしまうのも仕方がないのではないかと考えた。植樹作業が終わった後、見晴らしのいい場所でお昼ご飯を食べ、セルフ箸蔵に向かった。3日間毎日通ったセルフ箸蔵で最後

に振り返りをして、お世話になったみなさんに感謝を伝えた。割り箸製造体験をする中で仲良くなった利用者さんもいて少し名残惜しいほどだった。

これらの経験を通して、三好地域全体が林業と福祉を組み合わせ活性化させていこうという動きがみられ、その取り組みに対してみんなが積極的であることが感じられた。利益だけを求めるのではなく、地域における働く場所の提供を目指し、障がいにとらわれず生き生きと働いているセルフ箸蔵の利用者さんの姿を見て元気が出たし、この姿や取り組みを私たちが広めていくことで日本の森林を守るということの意義が伝われば嬉しいなと感じた。



木材センターで撮影。たくさんの木々を回転させて様々な方向からチェックしていたのが印象に残っている。



植樹作業を行っているときに撮影。驚くほど急斜面だった。

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

ホームページ：<http://www.ryukoku.ac.jp/npo/>
E-mail: ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草：〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL：075-645-2047 Fax:075-645-2064

瀬田：〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL：077-544-7252 Fax:077-544-7261